答案は捧げるつもりで

受験生、春というのにいま煉獄のような苦しみに耐えているこの若者の一群を思うと、胸迫るものがある。受験地獄は私にとってすでに半世紀近くも古いことなのに、今も夢の中でうなされることがある。

私の場合はもちろん旧制、高等学校突破が唯一の目標だった。受験者も少なく、高校も全国で三十校もなかった。中学卒業時の受験では見事不合格、いわゆる一浪生活が始まる。そして、兄の膝下におかれる。兄は明石の浜辺に住んでいたが、白砂青松の美しさも浪人の灰色の心をいよいよ濃くするだけだった。

失意の私への兄の指示はきびきびしていた。布団は毎日干せ。おかげで太陽の匂いの中で熟睡することを知る。外回りと便所の清掃も日課。休憩と運動時間の励行を第一にし、勉強時間は精神の集中を要求される。いわば私にとって生活の大改造である。雑念を引きずっただだら勉強の終止からの出発であった。

「お前は実力はある」。兄のこの暗示は、今考えると最大の救いだったようだ。

そのころの高校文科は定員六十人で、競争率は十倍以上。しかし、兄の必勝対策は的確だった。何万人いようが問題にするな。まず上位の三十人は秀才で問題外。競争相手は残りの三十人だ。合否の一線に百人もが一点を争ってひしめいている。だから一点だけリードすれば合格。文科系は数学がだめだから、数学で負かすのだ。—私は数学に全力をあげた。

「字は下手でも活字のように四角で大きく、余白いっぱい、分かっていることだけを書け。答案とは試験官に採点して下さいと捧げる気持ちで書くものだ」。—人生の試験にも当てはまるような助言で、今思うても懐かしい。

十二年三月、二度目の挑戦。またも絶望的。答案の欠陥しか思い出せないのだ。「力がつくと自分の力が不安になる」との兄の一言を頼りに、希望なく結果を待つ。まぐれにも合格。二番というおまけもついて。それも嫌な数学のおかげだった。

（一九八二年二月二十五日）